

更めて論述の要あるなし、されば此の理由も亦もとより存立し得べきにあらず、此の如く此等の理由は共に存立す可らずとせば、回鶻文字はネストル教徒の用ゐたるシリヤ文字より起り、此の教徒の作製に係るものなりとの一般に行はれたる説は全く其の根據を失へるものにして、其の系統と製作につきては、別に説明の施さるゝ所無かる可らず。

第一節 摩尼教徒の用ゐたるソグド文字より發達せりとの説

上に見たるが如く、回鶻文字がソグド文字との間に有する類似は、之がネストル教徒の用ゐたるシリヤ文字との間に有するものよりも更に著しきものありとすれば、其の基く所を以てソグド字に歸せんとするは、極めて自然のことゝ曰はざる可らず、されば⁽³⁸⁾ Gauthait 氏の記する所によれば、Müller 氏は早くも一九〇七年ソグド文字につきて、一方其の後の體にして又一層草體 (cursive) と成れる回鶻文字と、他方セミチック文字との間に於ける位置とを論じ、回鶻文字はソグド文字を襲用したるものに外ならざることを明らかにせり、此の考は又 Müller 氏が Radloff 氏にも報じたる所にして、一九〇九年 Radloff 氏の記する所によれば⁽³⁹⁾ 「Müller 氏が余に告げたるが如く回鶻文字がソグド文字の仲介によりて輸入せられたるものなることは誠らしからざるに非ず」と曰へり、されば氏は此の年一旦 Müller 氏の見解に賛し、回鶻字を以てソグド字より發達せるものなることを認めたるが如くに見ゆるが、然も翌一九一〇年に至りては、復「回鶻文字の字體はネストル教徒の用ゐたるエストランゲロ文字に酷似せり、故に吾人は此の文字が初め回鶻のネストル教徒の間に於て成立し、而して後摩尼教及び佛教徒の間に入りたる